

河川復元の概要

1. 河川名	2. 国名
釧路川（釧路湿原）	日本

-3. 摘要

釧路湿原は、北海道の東部の釧路川下流に位置し、面積約 2 万 ha の日本で最大の湿原であり、特別天然記念物タンチョウをはじめとする貴重な動植物の生息・生育の場となっている。

また、水がめとしての保水・遊水機能、地域気候を緩和する機能など重要な価値や機能を有しており、将来にわたって保護・保全すべき貴重な財産として昨今では認識されている。

しかしながら、近年の湿原周辺の経済活動に伴いその面積が減少し、植生状況も湿潤した環境で生育するヨシ・スゲ群落からより乾燥した環境でも生育するハンノキ林に変化してきている。

北海道開発局の調査によれば、湿原の面積は約 50 年前と比べ約 2 割減少し、ハンノキ林の面積は、20 年前と比べ 3 倍以上に拡大している。

ハンノキ林の拡大については、周辺の土地開発や流入河川の直線化に伴う湿原域への土砂流入の増大、地下水位の低下等に起因するものと言われている。

釧路湿原の自然環境の劣化・悪化は、野生生物のみならず人間にとっても好ましい状況ではなく、本来の湿原環境の保全・回復のための対策が必要な状況にある。

平成 11 年、植物学、河川工学など学識経験者、関係機関などからなる「釧路湿原の河川環境保全に関する検討委員会」が設置され、専門の 5 つの小委員会での調査検討も加えて、平成 13 年 3 月には、保全目標と目標達成のための 12 の具体的施策からなる「釧路湿原の河川環境保全に関する提言」が北海道開発局をはじめ環境省、北海道の関係機関、地元関係市町村に発出された。

この提言では、保全目標を、湿原環境が大きく変化する前の 1980 年当時のレベルに回復させること、当面の目標としては、現状の湿原環境を維持・保全することとして、ハード、ソフトの両面を持ち合わせた 12 の施策が示された。

なかでも、湿原植生の制御については、現地において大規模な湛水により拡大したハンノキ林をコントロールする実験が始められており、また、釧路川においては、過去に直線化した河道を蛇行化するための調査が進められている。

また、この提言を受けた 10 の関係行政機関等は、いわゆる縦割りの弊害を極力排除しつつ、施策の実施に向けてより具体的な実行計画を作るためのプロジェクトチームである「釧路湿原タスクフォース会議」を組織している。

● プロジェクトの概要



-2. プロジェクト実施期間

開始時期 (立案の開始) :

平成 11 年 9 月 (湿原保全委員会の設立)

平成 13 年 3 月 (提言まとめ)

平成 13 年 12 月 (タスクフォース会議の設立)

施工開始時期 : 平成 12 年 9 月 (湿原湛水試験開始)

施工終了時期 : 未定

-3. 主導機関

- ・国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部
- ・タスクフォース構成機関 (11 機関)

● 背景 - 現在

-1. 原生自然、二次的自然、三次的自然を改変する大規模事業を記述してください (写真や地図、画像を用いて)。その事業の主な要因と目的は何ですか?

表:

	長さ (km)	幅 (m)	深さ (m)
改変後の流路の形状	88.3km	約 40m	

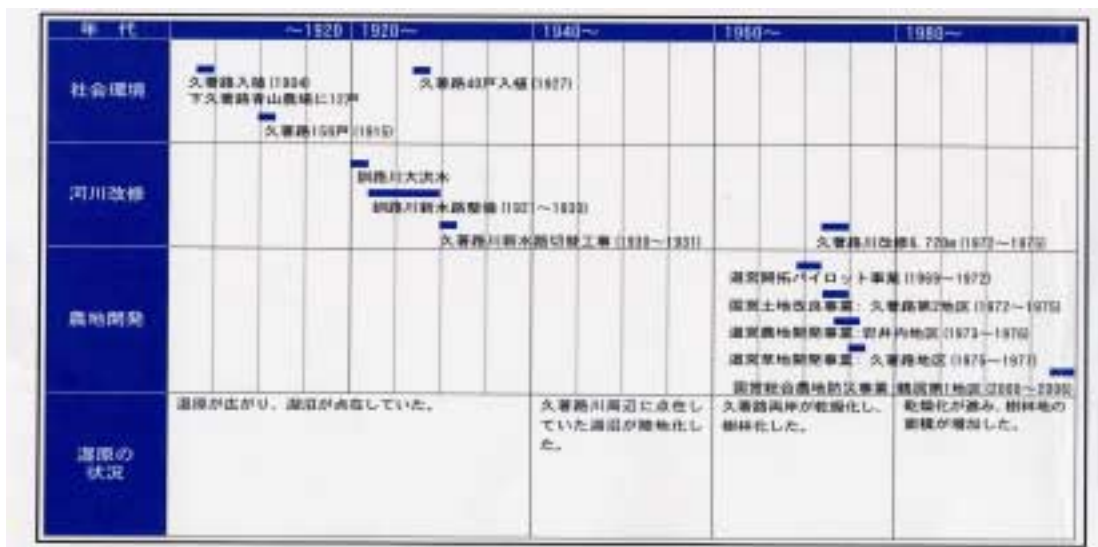
解説:



大正 9 年 (1920 年) の大洪水を契機に釧路川の治水計画が策定され新釧路川掘削をはじめとする釧路川中下流部でのショートカット工事が昭和 50 年代中頃 (1980 年頃) まですすめられた。

昭和 30 年代中頃 (1950 年頃) からは、釧路湿原周辺で農地開発事業が始められ、地下水位低下を図るために久著呂川、雪裡川など釧路川の支川の直線化がすすめられ、結果として湿原へ土砂流入が増大することになり、ハンノキ林が拡大したと言われている。

図 2. 新水路・放水路一覧



-2. 大規模事業の結果として生じたポジティブな、あるいはネガティブな影響は何がありましたか？

釧路川およびその支川のショートカットにより洪水被害は軽減されるとともに、湿原周辺における農地を主とする土地利用が進んだ。しかしながら、それらに伴う湿原域の直接的な土地改変や地下水位の低下及び土砂の堆積により湿原、湿地としての環境要素が喪失された。

-3. ネガティブな影響については、何にその原因がありましたか？

- ・ 土地開発にともなう直接的な土地改変
- ・ 地下水位の低下
- ・ 湿原への土砂の流入



図4. 釧路湿原周辺地形図（昭和60年）